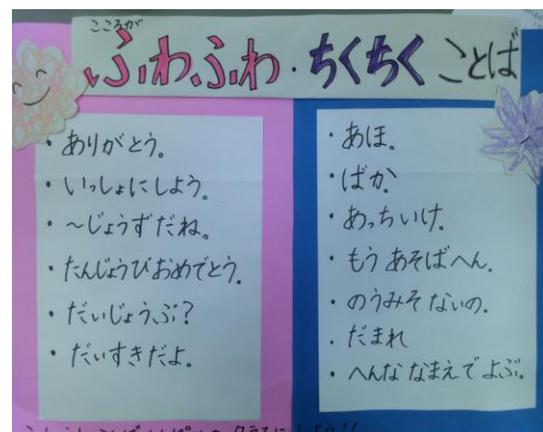


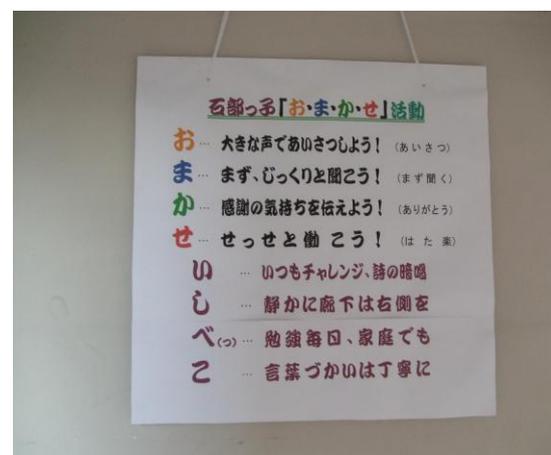
(5) エンカウンター

子ども達のグループ作りや、友だちの気持ちを理解するために、エンカウンターに取り組んだ。「ふわふわ・チクチク言葉」の取り組みでは、子ども達から写真のような意見が出てきた。振り返りでは「今までチクチク言葉を使っていたけど、これからはふわふわ言葉を使いたい」という話になり、生活に生かしていこうとする積極的な姿勢が見られた。また、日常生活の中でも「これはチクチク言葉やで」などという声が聞かれるようになり、子ども達に浸透してきたのが感じられる。その活動だけで終わらない、継続的な取り組みが必要である。



(6) おまかせ活動 合い言葉「おまかせ、いしべっこ」

本年度教育実践の重点である子どもたちの自尊感情の向上をめざし、言語感覚、規範意識、人権感覚を充実させるための合い言葉を設定した。合い言葉は目標を具現化するために、子どもたちに親しみやすく、わかりやすくした。また、合い言葉を廊下や教室に掲示し、子どもたちの生活の中にとけこませた。教室ではみんなで読み合う機会をもち意識化をした。課題としては、合い言葉を日々意識し取り組んでいく環境作りである。



2、自治力を高める活動

(1) 児童集会

例年児童集会は、委員会活動の一環として、各委員会からのお知らせやよびかけなどを発信する場であった。しかし、このような内容では、児童のアイディアや自治力を育む上で限界を感じた。今年度、第一回目の委員会で運営委員会の児童たちに、これまでの枠にとらわれることなく、自分たちのアイディアから自分たちで創り上げる児童集会の内容を考えてみようかと問うてみた。すると、東日本大震災で被害に遭った地域や人々のために自分たちができることを探したいという提案があった。運営委員会の児童たちは、自分たちがリーダーシップをとりながら全校児童間の交流を図り、全校児童みんなで取り組む活動を望んでいた。話し合いを重ねた結果、色別活動の中で、上学年が下学年に作り方を教えながら鶴を折った。一人ひとりの東日本への思いをこ





めた鶴を千羽鶴としてひとつに繋ぐことは、全校の心もひとつになったように感じたという。そして、もうひとつの活動は各クラスで東日本への応援メッセージビデオを作りである。学級での話し合いを重ね、応援歌やメッセージをビデオにおさめた。ボランティア委員会の児童の募金募集等の呼び掛けも行われた。児童達の思いを込めた千羽鶴とビデオ、募金などは、現地の小学校へと届けていただ

き、お礼の手紙が返ってくるなど、心の交流をはかることができた。

また、今年度からは、児童の主體的な児童集会の運営を、ということで、教室から体育館への移動も運営委員や代表委員が引率した。放送設備の準備等も児童の手で行われた。司会進行のセリフも暗記し、全校児童の顔を見ながら語りかけることもできるようになった。自治力の高まりは、確かにみられ、それと比例した児童の達成感がみられた。自分たちのアイデアからスタートし、自分たちの手で創り上げた児童集会は、数を重ねていくにつれ、内容、児童の表情、共に充実した。しかし、このような自治力を尊重する教育活動には、思考錯誤や情報収集、内容検討の話し合いなどが必要なため、多大な時間の確保が必要になってくる。現状では、休み時間を返上しての時間確保であるため、児童への負担が気にかかる。

(2) 色別活動

本校の色別活動は、6色から成り、各色6班編成、計36班に分かれて活動している。色別活動で目指す自治力は、運動会で発揮された。応援アピールのセリフや振り付けでは創造的な力、綱引きでは、チームで育んだチームワークが競われる。月1度の色別遊びは、45分間確保された水曜日の昼休みに行われる。その週の月曜日は、5・6年の高学年リーダーが、全校児童が楽しめるような内容、ルールについて話し



合っている。当日の運営も6年生の班長を中心とした高学年が進める。もちろん、高学年はリーダーとしての自覚が芽生え、他の学年の思いにも寄り添ったルールにも工夫が光る。低学年の児童は、高学年のリーダーのアイデアや優しさで思いっきり遊びを楽しんでいる。異年齢の集団の中、顔と名前を自然と覚え、交友関係を広げることができた。一方、